

研究ノート：「都市と市場^{いちば}の史的的研究」(続)

徳島 達朗

はじめに

1999年8月、学生の在外研修指導のため、ヨークに滞在した時、リーズのマーケットホールを見学する機会があった。その際、入手した資料と筆者がオフィスの許可を得て撮った内部の写真を紹介する。さらに、最近刊行された『イギリス・マーケットホール—社会史、建築史』¹の紹介も行い、さらにかつて行った「都市と市場^{いちば}の史的的研究」²の増補の準備作業を行う。

I ヨークの公設小売市場の現状については、『市場史研究』に記したが、³その末尾に以下のように書いた。「以上、ヨークでの公設小売市場(オープン・

1 James Schmiechen and Kenneth Carls, *The British Market Hall; A Social and Architectural History* 1999 Yale University Press, New Haven and London

2 徳島達朗『市場流通史研究』長崎県立大学研究叢書1(長崎県立大学学術研究会, 1993年)所収,「第3章 都市と市場^{いちば}の史的的研究」において,以下を論じた。「第1節 明治期日本人の見た欧米都市の市場」,「第2節 19世紀ロンドン都市行商の復活」,「第3節 リバプール公設市場の成立と展開」,「第4節 イギリス北部の公設市場と連鎖店」,「第5節 グラスゴーの市場の特徴」,「第6節 大正8年,仙台市公設小売り市場の設立と反響」

3 徳島達朗「ヨーク ニューゲイト・マーケット」市場史研究会『市場史研究』第20号 2000年12月

マーケット)の現状を紹介したが、管見の限り、バーミンガム中心部の公設小売市場(オープン・マーケットおよびマーケットホール)もリーズ中心部のマーケットホールも盛業中である。機会があれば取り上げたい」と。本稿で、その約束の一端を果たしたい。

1999年8月18日、リーズ市のカークゲイト・マーケットホールを見学した。ヨーク在住の佐伯岩夫氏(通訳・翻訳家)の協力を得て、マーケット・オフィスを訪れた。その際、筆者は概略次の諸点を質問した。

一日本人は近代化の過程で欧米の都市を訪れ、都市行政のあり方を研究した。その一つが都市における公設小売市場である。リバプールでは1822年に公設小売市場の第一号としてセント・ジョーンズ・マーケットが開設された。リーズは羊毛工業と関連して繊維製品の集散地として発展した。リーズの公設小売市場の成立と発展について知りたい。日本では、現在、大規模小売商業(スーパー・マーケット、ショッピング・センター)との競合で、公設小売市場は営業不振となり、多くの都市で公設小売市場は廃業、閉鎖に追い込まれている。カークゲイト・マーケットの営業成績はどのようなか。—⁴

オフィサーは営業成績の記録はここにはない。市場の歴史と現状はこれを参照してほしいと一冊のパンフレットをくれた。⁵

市場内の写真撮影の許可を得て、内部の様子を撮影したので参考に供したい。

写真1は正面入口で堂々たる建造物(ゴシック建築)である。写真2は市場内にあるマーケット・オフィス(インフォメーション・センター)の入口。以下の写真はいずれもマーケットホール内部の天井、通路、店舗である(写真2は佐伯氏の撮影。それ以外は筆者の撮影)。

4 この点に関してはわれわれの共同研究を参照されたい。『わが国における公設小売市場の形成と展開に関する研究』研究代表者岩本由輝、文部省科学研究費・基盤研究B一般(1)(研究期間平成10年度～平成12年度)報告書。その中で筆者は「現代における福岡市公設小売市場の開設から廃止にいたるまでの経過」を分担している。

5 Steven Burt & Kevin Grady, *Kirkgate Market An Illustrated History* Leeds City Council and Norwich Union 1992

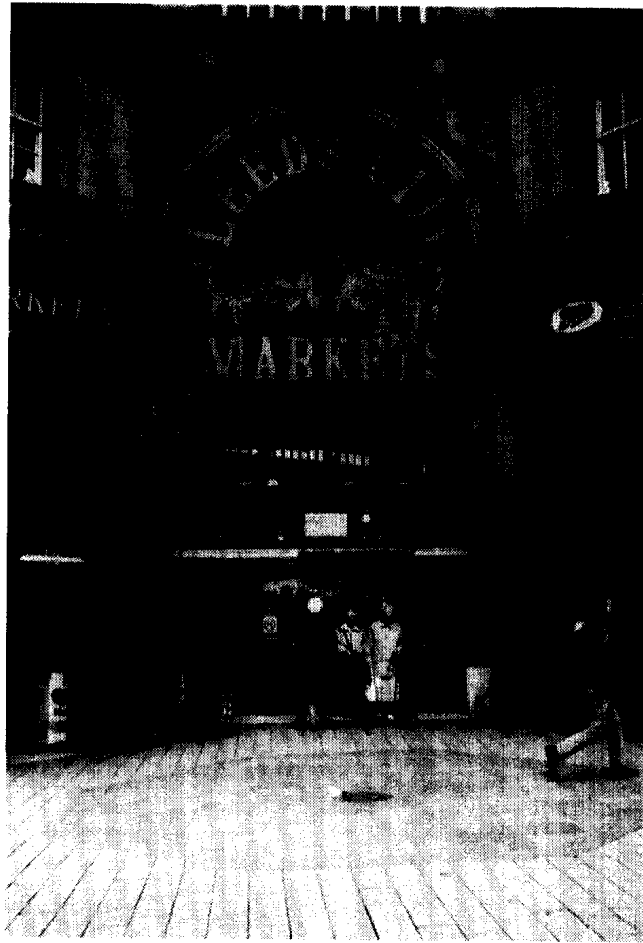


写真1



写真2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7

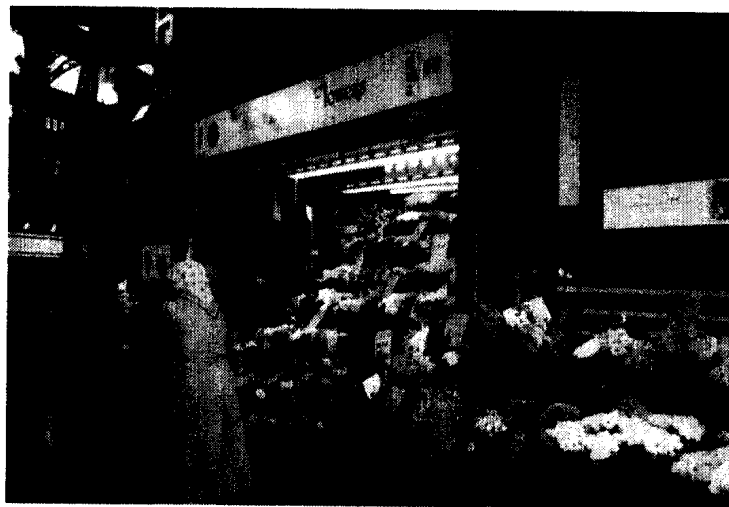


写真 8

II 次にオフィスで入手した *Karkgate Market; An Illustrated History* の一部を紹介する。

「リーズの人口は、1821年の八万一千人がわずか三十年後には、十七万二千人へと倍増する。当時ますます商工業の中心地として発展するが、1835年には選挙による初のリーズ市会が誕生した。1842年、リーズ市改革条例により権限を拡大し、マーケット委員会がカークゲイト・マーケットを管理することになった。1853年、リーズ市は屋内市場の建設を企図し、先進各都市を視察している(バーミンガム、ウスター、マンチェスター、リバプール、ニューカッスル)。1857年5月、マーケットホールは完成したが、1858年の『リーズ・ガイド』は次のように紹介している。」「この建物は鉄とガラスでできており、四千四〇ヤードの広さがあり、ヴィッカー・レーンとカークゲイトの交わる地点にある。建築様式はゴシック式である。四十四の店舗が外周にあり、三十五の店舗が内周を占める。また四列の鉄製ストールが並ぶ。夜間にはこの美しいクリスタル・マーケットホールには二百のガスライトのイルミネーションで飾られる。ここはイングランドにおいて、この種の建造物の完成した姿を示している。」

「この屋内市場は日曜日を除いて毎日開場した。5月から9月までは、午前五時開場、十月から四月までは、午前七時開場である。営業時間は平日、夜九時まで、土曜日は十一時までである。同市場は1893年の火事で焼失したが、市当局はその機会に道路の拡張も含めてカークゲイト・マーケットの再建を決定した。リーズ市のランド・マークとして目立つ、背の高いマーケットホール建設を計画した。マーケット委員会は、1899年1月、建築デザインを公募することを決定した。コンペティションの結果、ロンドン・ウエストミンスターのジョンおよびジョセフ・リーミングが入賞し、150ポンドの賞金を獲得した。彼らはハリファックスの美しいマーケットホールをデザインし好評を博していた。その後、拡張を続け、1904年にヴィッカー大道りからのマーケットホールへの出入が認められ堂々とした様相を呈するようになった。」

その後、1992年にも火事に見舞われているが、1976年と1981年に復興し、内部の改造と拡張を行い、筆者の見学したリーズ・シティ・マーケットとなり、現在ヨーロッパ有数のマーケットホールとなっている。

内部の豊富な写真や絵が掲載されているが筆者撮影の写真と重複するので省く。

III 次に『イギリス・マーケットホール—社会史, 建築史』*The British Market Hall; A Social and Architectural History* (以下『マーケットホール』と略す。)の紹介と、同時に筆者の同分野のかつての論稿も再現し増補の作業を行う。

前掲書の著者はジェームズ・シュミーヘン James Schmiechen (セントラル・ミシガン大学歴史学教授) とケニス・カールス Kenneth Carls (イリノイ大学グラフィック・デザイン学教授) である。

この分野の研究に入ったきっかけはシュミーヘン教授が、グラスゴーのストラスクライド大学のW. ハミッシュ・フレーザーW. Hamish Fraser 教授に出会ったことであると、同書謝辞にある。筆者は1990年の夏、フレーザー教授の *The Coming of the Mass Market 1850-1914* の翻訳⁶の相談とグラスゴー公設市場調査⁷のアドバイスを受けるために、グラスゴー・ストラスクライド大学の芸術社会学部長室に同教授(現在は歴史学部長)を訪ねていった時、同教授はアメリカから公設市場の研究をしている研究者が、近いうちにグラスゴーに来る予定であると教えてくれた。それがシュミーヘン教授であったのだが、残念ながら日程の関係で同教授に会う機会は持てなかった。同一分野の研究を志している筆者としては、このたび出版された書物を手にして格別の「重さ」を感じている。その後、1993年の夏、共訳者三人(徳島達朗, 友松憲彦, 原田政美)がフレーザー教授に翻訳を届けた際には、同教授は自ら自動車を運転して産業遺産(ロバート・オーエンのニューラナーク工場跡)見学の案内をしてくれた。

話をもどして、『マーケットホール』の紹介をおこなう。全体の構成は以下のとおりである。

6 W. ハミッシュ・フレーザー著/徳島達朗・友松憲彦・原田政美 訳『イギリス大衆消費市場の到来 1850—1914年』梓出版社 1993年

7 徳島達朗「グラスゴー市場の特徴」(『市場流通史研究』晃洋書房 1993年 所収)

序論：食物，市場，歴史

第一部：都市の空間と公設市場の再興

- 1 伝統的市場
- 2 マーケットホールの改善
- 3 所有権，入市税，市場改革

第二部：公設市場の建築とデザイン

- 4 大いなる期待：意気軒昂な建造物と社会の目標
- 5 マーケットホール：タイプとデザイン
- 6 構造，立地，材料

第三部：マーケットホールと社会の変化

- 7 食物，マーケットホール，生活水準
- 8 成長のパターンと改革
- 9 マーケットホールの全盛期，1830—90年

第四部：衰退と回復

- 10 公設市場と小売業革命，1890—1939年：衰退あるいは近代化？
- 11 スーパーマーケット時代の公設市場：1939年から現代まで

以上のように，本書は四部構成である。イギリスの市場^{いちば}の歴史全体をみわたせる内容となっていてこの分野の研究の貴重な成果と評価できよう。いろいろな角度から利用可能な市場案内^{いちば}となっている。本書の書名は [The British Market Hall] であるが，副題は [A Social and Architectural History] である。つまりマーケットホールの社会史・建築史である。その協力体制が如実に示されていて，マーケット史の遺産の豊富な写真と画像が満載されている（図版187葉）。市場発展史が視覚的にも理解できてありがたい。

(1) 若干実例を示そう。リバプールのセント・ジョーンズ・マーケットであるが，同市場について筆者はかつて学会で報告している。⁸ 同報告を一部再

8 徳島達朗「リバプール市営 Market の成立と展開—St. John's Market を中心に—」社会経済史学会，第56回大会，共通論題：産業革命と国内流通機構—日本とイギリスの比較市場（いちば）史一，『社会経済史学』第54巻第1号，1988年，所収。

録する。「産業革命期の生鮮食料品市場の形成は、近代的賃労働形成のための一つの重要な柱をなすものといえよう。多数の労働者が、自己の得る賃金で食料を継続的に入手し、それを消費することによって、労働力の再生産を図るということである。産業資本もこの段階で食料（農産物）の低価格化に自己の利益を見出すに至ったであろう。この生鮮食料を供給する商業組織の末端が小売市場である。リバプールでは、18世紀末から19世紀にかけて人口の増大、市街地区の拡大があり市場設備の欠如による不便さが痛感されるようになった。その結果、従来の街路市場を整理統合し、公設小売市場（ホール）の建設に着手するのである。1822年2月6日、リバプール市当局は次の予告を新聞に掲載した。―来る3月7日以降、公共野外市場として占有されていた市場（各市場名は省略）は閉鎖される。それにかわって、来る3月7日以降、グレート・シャロット通りの西側、エリオット通りの北側、ローズ通りの南側の新設の建物が、あらゆる種類の食品販売を行う公設市場として開設される予定である。―同市場は当時、全国のマーケットホールのモデル的な存在であった。この点については、産業革命期のイギリス小売商業研究の権威、デヴィッド・アレクサンダーD. Alexanderの著書により確認しておく。」「湿気の多い北部工業地帯の不潔な環境のもと、労働者は工場での労働から解放された後、夜の買物にでかけることになるので、完全に屋根で覆われた、ガス灯のともるマーケットホールの必要性は、他の地方の市場町より緊急性が大であった。そのため市当局は市場の計画を立て、資金を動員する手段を講じた。このようにして、1822年に、35,296ポンドを投じて、セント・ジョーンズ・マーケットを建設したのであるが、これは他の工業都市の公設マーケットホールのモデルになった。」⁹

同市場を『マーケットホール』の図版を利用して紹介する。

図1（同書72ページ、図版5.21および5.22）は、上が1822年建設のセント・ジョーンズ・マーケットの外観、下がその内部である。市場内の外周に62の店舗が並び、ストールとベンチが取り扱い品目別に配置されている。

図2（同書32ページ、図版2.15）は、1822年の同市場内第五アベニューで

9 D. Alexander, *Retailing in England during the Industrial Revolution* 1970. p.56



図 1



図 2



図 3



図 4

左側が野菜のストール, 右側が鮮魚のストールである。ガス灯があり屋内マーケットであるので, 夜間労働者の買物が可能である。

図 3 (同書33ページ, 図版 2.16) は, 半世紀後の1882年のセント・ジョーンズ・マーケットホールで, 新照明が入り, 食品の配列も整然としているが,

顧客との対応は旧態依然としていて、商品を並べてあるストールの前で行われている。

図4 (同書33ページ, 図版2.17) は, 1922年頃の写真で, セント・ジョーンズ・マーケットホール創設の100年後である。市場内の店舗は独立し, ロック・アップ・ストールとなり, 販売人はカウンターの背後で顧客と対応できるようになっている。

以上のようにリバプールのセント・ジョーンズ・マーケットの百年の歴史が視覚的に確認できる。

(2) 次に, リーズ・カークゲイト・マーケットであるが, かつて筆者は同市場について執筆しているので, 記しておく。¹⁰「リーズは人口約50万人で, 鉄道, 道路の交通輸送の整備された, ヨークシャー最大の通商センターである。最初の屋根つき市場は, 1857年に建設され, 主として小売のために使用されていたが, 1902年に廃止され, 1904年に Kirkgate General Market の建設にともなって, 後者に吸収された。このカークゲイト・マーケット内の青果卸部門で青果の小売も行われていたのであるが, 同マーケットの西側の建物は, 非農産物の小売市場にあてられていた。市場内の構造は食料と非食料の区別を設け, さらに特別の商品用の売場を区別した(たとえば食肉)。果実, 花卉, 野菜, 魚, 家禽類の卸と小売が同一の建物内で行われているのは不便であった。消費者で賑わうのは, 火曜日と土曜日の午後から夕方であった。小売市場のテナントは170人であるが, その内42人は農産物を扱った。カークゲイト・ジェネラル・マーケットは公設であるが, 次のような構成になっていた。全体は五つの市場で成り立っていた。小売の関係では, 小売魚市場, 小売市場広場, 小売屋内市場である。リーズは19世紀に毛織物産業で大きく発展した町で, この一世紀で人口は10倍に増えたのであるから, 産業革命, 工業化の進展と都市食料の供給については, その対応に苦慮したことであろう。」

「1858年のリーズのガイドには, この新マーケットホールについて次のよう

10 徳島達朗『市場流通史研究』長崎県立大学研究叢書1 (1993年), 132ページ以下。

に紹介が載っている。」「この建物は、鉄とガラスでできており、3040ヤードの広さがあり、ヴィッカー通りとカークゲイトの角にある。建物の建築様式はゴシック式で、建物内の外周に44の又内側には35の便利な店舗があり、さらに鉄枠で仕切られたストールが4列ある。夜間には、この美しいクリスタル・マーケットホールは200のガス灯で飾られる。これはイングランドにおいて、この種の建造物の完成した姿をなしている。」「同市はその後も工業、商業の中心地として発展を続け、取引量の増大を捌くために、市当局は1898年に新たにマーケットホールの建設を決議し、1904年にシティ・マーケットを開設している。正面の大道路に面して18の店舗を配し、内部のオープン・スペースはストールがならび、その周囲を小商店が取巻いていた。階上部分はホテル、レストラン、ビリヤード、喫茶店、クラブ・ルームが入っていた。総工費は、11万6750ポンド。このシティ・マーケットは現代まで存続したが、1875年および1898～1900年増築部分は1975年の火事で焼失した。」¹¹

この新旧カークゲイト・マーケットの姿を『マーケットホール』掲載の写真で見てみる。

なお、内部の写真も掲載されているが、筆者撮影の写真と重複するので省く。

図5（同書83ページ、図版5.43）は1857年建設のカークゲイト・マーケットホールである。リーズの二番目のマーケットホールで鉄枠とガラスで構築されている。

図6（同書86ページ、図版5.48）は1904年当時のカークゲイト・マーケットホールの姿である。正面フロントは、当時のデパートと同様の構えとなっている。

(3) 次に『マーケットホール』の第8章「成長と改革のパターン」のうち

11 この部分は、*A History of Modern Leeds*, edited by Derek Fraser, 1980. 所収の Kevin Grady, "Commercial, marketing and retailing amenities, 1700-1914" によるものである。なお、筆者がカークゲイト・マーケット・オフィスでもらったパンフレットの執筆者の一人が、この Kevin Grady であるので内容的に重複している部分もある。



図 5



図 6

筆者の関心に応じてその一部を紹介し若干のコメントをしておく。

* 市場改造^{いちば}の動きについて

図7 (『マーケットホール』147ページ, 図8.3) に示されているとおり, イギリスでの市場建設の最盛期は1820年から1880年の期間であった。1751年から1950年の間に591の新規の公設小売市場が建設されたが, 1901年以降は46市場で, それ以外(545市場)は, 1901年以前の建設である。市場建設の盛んな時期は三つあった。1770年代と1780年代, 1800年代と1820年代, そして1870年代である。1770年代および1780年代に市場建設が盛んだったのは, 食糧生

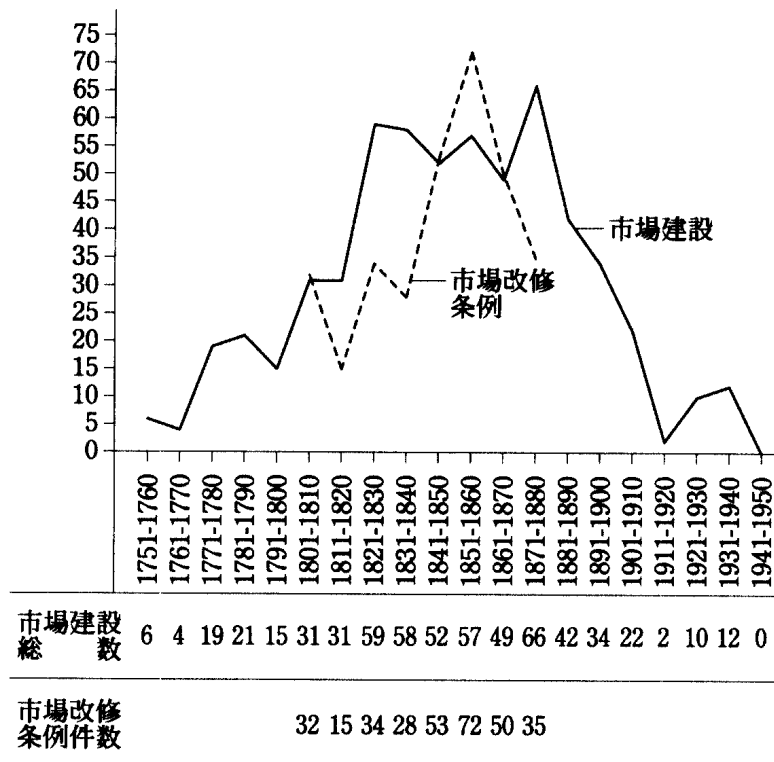


図 7

産と人口の増大、あるいは食糧暴動への対応でもあった。1820年からの半世紀市場建設のピークを形成しているが、これは市場改造活動と連動している。これは南西部と工業都市、例えばリバプール、リーズ、ニューカッスル、バーミンガムにおいては巨大なマーケット・ビルディングが建造された。

この最初の公設市場建設ブーム（1780年代および1800—1830年）は、都市改造に関して国家が発揮したイニシアティブ（1835年の地方都市条例、Municipal Corporation Act や1848年の公衆衛生条例、Public Health Act）の幾十年も前の事であるので、明らかに地方都市行政が都市行政サービスの一環として、市場改造に着手したといえる。歴史家は1840年代の大衆的不満が穀物法の廃止へと導いたと指摘するが、都市の食料危機への対応として、1820年代の地方都市行政の市場建設があったことを指摘する歴史家は少ない。¹²

12 この部分は『マーケットホール』146—147ページによった。

* 公設市場展開の地域差について

市場の発展について、北西部と南東部の差異が指摘される。ロンドンでは屋外での買物が主流であった。また、南部、南東部では早くから個人商店が公設市場よりも重要な食料供給の役割を果たしていたし、公設市場に取って代わった。1800年までに、イングランドの南部、南東部では西部、南西部、北部の一人当り二倍以上の商店が存在していた。このことが公設市場の近代化をおしとどめていた。イングランドの南部、南東部は他地方よりも小売商店システムを持っていて、このことが、この地域で公設市場を必要としなかったことを示している。同様に重要なのは、スコットランドの都市部（特にグラスゴー）ではマス・リテイリング・リヴォリューション（仮に小売業革命としておく＝筆者）といういっそうの近代化が進行し、マルチプルショップ（連鎖店）とビッグストア（大規模店）が頭角を現わし、公設市場の重要性を低めた。¹³

上記の事（ロンドン、グラスゴーの市場）は、筆者もかつて論じていて同意見であった。詳細は、拙稿「19世紀ロンドン都市行商の復活」と「グラスゴーの市場の特徴」を参照されたい。¹⁴ (2001年8月30日)

13 『マーケットホール』155ページ。

14 徳島達朗『市場流通史研究』（晃洋書房、1993年）96ページ以下、および142ページ以下。